

大学進学動機とポジティブな自己信念が 大学生活におけるストレス対処に及ぼす影響

子 安 増 生

橋 本 京 子

(京都大学大学院教育学研究科)

The effects of motives for continuing education at a university and positive self-belief on coping with stress in student life.

Masuo Koyasu & Kyoko Hashimoto

(Graduate School of Education, Kyoto University)

Summary

The present study investigates the effects of motives for continuing education at a university and the positive self-belief on coping with five stressful events (future course, scholastic achievement, human relations, money, and health) in student life. One hundred and twenty-one graduate and undergraduate students participated in the study in which a questionnaire method was used. Motives for continuing education at a university were divided by a factor analysis into 1) advice from family, teachers and peers, 2) psycho-social moratorium, and 3) improvement of abilities. It was found that positive self-belief has a single factor structure. A structural equation modeling applied to the complete data suggests that passive motives ("advice from family, teachers and peers" and "psycho-social moratorium") are negatively correlated with positive self-belief while active motives (improvement of abilities) are positively correlated with positive self-belief, which in turn has a positive correlation with positive coping with stressful events. The most important suggestion is that the motives for continuing education at a university does not directly affect coping processes with stressful events in student life. This shows that some positive self-beliefs intervene.

本研究は、大衆化の進行が著しいとされるわが国の高等教育において、多様な進学動機を持って入学してくる学生が大学生活の中で遭遇する様々なストレスフルな状況に対してポジティブな認知をどのように形成するかという観点から、大学生・大学院生を対象に質問紙法により実証的に調査した結果を報告するものである。

現在のわが国の高等教育のあり方を考えるとき、大学進学率の上昇に伴う大学の大衆化ということを抜きにするわけには行かない。アメリカの社会学者マーチン・トロウが高等教育の大衆化の過程を次の3段階に分けたことは夙に知られている(トロウ、1976)。

A. エリート型高等教育：ヨーロッパでもアメリカでも日本でも、高等教育は最初、限られたごく少数の者を対象とするエリート養成のための教育機関としてスタートした。そこでは、個人指導(例：オックスフォード大学のチューター制度)ないしは少人数のセミナー形式の小規模できめ細かな指導のもとに教育が行われた。そして、学生には、卒業後は各界のリーダーとして活躍する道が用意されていた。現在でも、イギリス、フランス、ドイツなどの西欧諸国の高等教育は、大学の大衆化路線が敷かれているにもかかわらず、なおこのようなエリート型高等教育の特徴を色濃く残している。トロウによれば、高等教育機関に在籍する者が同年齢層の15パーセント以内であれば、エリート型高等教育の基本的性格は維持されるという。わが国では、大学進学率が15パーセントを越えたのは昭和40年代半ばであり、まさにそのときに「大学紛争」が起こったのである(高等専門学校などを含む高等教育進学率はすで

に昭和30年代後半に15パーセントを越えている）。

B. マス型高等教育：生徒やその保護者の進学要求が高まり、大学進学率が15パーセントを越えると、高等教育は特権階級のもものではなくなり、大衆化路線が進展する。「受験競争」が社会問題化し、機会均等の理念が叫ばれるようになる。大学には多様な進学動機を持った者が入ってきて、「大学は学問の場である」ということが必ずしも自明のことではなくなる。多くの学生を収容するため、きめ細かな教育は困難な状況となり、大教室でのいわゆる「マスプロ授業」が一般化する。大学を卒業したからといって、専門的な職業や高い社会的地位が約束されるわけではない。大学卒業者のホワイトカラー（事務労働者）化が進展する。1970年代以後のわが国や北欧諸国の高等教育は、基本的にマス型高等教育であった。

C. ユニバーサル型高等教育：高等教育の大衆化がマス型からさらに進展し、進学率が50パーセントを越えると、その性格は一段と変質する。高等教育は、希望するものの権利ではなく、むしろ万人の義務に近いものとなる。すなわち、大学を出れば就職に有利なのではなく、大学を出ていないと就職に不利になるのである。高度に競争的（highly competitive）な大学が残る一方、無試験入学（open admission）の大学が出現する。その結果、高等教育に必要な最低限の学力さえも備えていない者も入ってくるので、そのような入学者が多い大学では、中等教育以前の内容の補習教育が行われることになる。トロウの『高学歴時代の大学——エリートからマスへ』がわが国に紹介されたときには、ユニバーサル型の高等教育を行っているのはアメリカ合衆国だけであった。わが国はその当時、ようやくマス型の段階に到達したばかりであった。しかし、その後もわが国の大学進学率は上昇を続け、2002年度には大学・短期大学への進学率は48.6パーセントとなっている。これはもはやユニバーサル型の高等教育の段階であると言ってよいだろう。

大学への進学がごく一般的なものになるにつれ、入学者の大学進学動機も多様化してきた。すなわち、「学問を究めたい」、「学業に専心したい」という動機で入学してくる者は全体としては少数派となり、「学生生活を楽しみたい」や「友達も行くから」といったような直接学業とは関係のない「非学業的進学動機」、あるいは、「他にすることがないから」、「何となく」というような特に明確な目的を持たない「モラトリアム型の進学動機」も多く見受けられるようになった。

このような大学進学動機が多様化について、淵上（1984）は、高校3年生506人を対象に大学進学志望動機に関する質問紙調査を行い、「大学の本来的機能」、「家族への配慮と規範機能」、「モラトリアム機能」、「大学の副次的機能」、「大学の経済価値機能」の5因子を抽出し、それらの機能と人的影響源（教師、父親、母親、友人）との関係を調べた。その結果、学業成績の水準によっても進学動機の意味は異なるが、進学志望動機の形成に対して家族の影響力が大であること、特に目的意識をもった進学には教師と父親の影響力が深く関連していることが示された。さらに、目的意識をもたない進学動機は、モラトリアム機能にまとめられることも明らかにされた。

大学進学動機が多様化は、大学生活における学生の適応にも影響を及ぼしているという指摘がなされている。その一つとして、スチューデント・アパシーに関する研究が挙げられる。下山（1996）は、スチューデント・アパシー研究の歴史的、理論的検討を行っている。歴史的には、①わが国において大量留年が問題になり、アメリカではWalters, P.A.J. によって“student apathy”の概念が提唱された1960～70年代前半、②学園紛争の嵐が取り「シラケ」という虚脱感が蔓延した1970年代後半、③大学大衆化時代の学生特有の無気力が注目を集めだした1980年代前半、④アパシーが特異的障害でなく一般大学生のものとして捉えられるようになった1980年代後半、⑤拡大するアパシー概念の整理が始まった1990年代、という時代区分が示されている。また、理論的アプローチとしては、①障害論—精神病理学理論、②障害論—パーソナリティ論、③発達論—精神分析的発達論、④発達論—アイデンティティ論、⑤発達論—進路発達理論、⑥認知学習理論の6種類が区分された。

この論文に先立ち、下山（1992）は、大学2年生369人を対象にアパシーを下位尺度とするモラトリアム尺度の作成を行うための調査を実施した。因子分析の結果、モラトリアム尺度を構成するものとして「回避」、「拡散」、「延期」、「模索」の4因子が見出された。

大学進学動機とスチューデント・アパシーとの関連性については、鉄島（1993）が次のような研究を行っている。治療的援助が必要とされる臨床群でないという意味での一般学生381人を対象とする質問紙調査の因子分析の結果から、アパシー傾向に関して「授業からの退却」、「学業からの退却」、「学生生活からの退却」の3因子が抽出された。

また、進学動機を「大学の本来の機能」、「大学の副次的機能」、「周囲への配慮の機能」に分け、進学動機の曖昧さや消極さが「学業レベルの退却」に影響していることが明らかにされた。

さらに安藤 (1989) は、私立女子大学・短期大学の学生551人を対象とし、大学生活に対する高適応群と不適応群の進学動機の違いを分析し、高適応群の学生が「知識・技術・資格の獲得」や「教養・視野の拡大」などの積極的な目的をもって進学してきているのに対し、不適応群の学生の進学動機は「誰でも大学に行く時代だから」という無目的・消極型の動機が第一であることを示している。

以上のような一連の研究に対して、もう一つ重要な視点があることを指摘したい。それは、学生が大学生活の中で遭遇する様々なストレスをどう認知し、どのように対処するかという問題であり、そのような認知的対処に際しても、大学進学動機が影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。しかしながら、大学進学動機がストレスへの対処法に直接的に影響するという説明を行うとするならば、それはいささか単純であるように思われる。なぜなら、大学進学動機は学生が入学以前にもっていた過去のものであり、大学入学後の様々な活動を通じて、学生がどのような大学生活観やどのような自己認知を形成していくかを見ることが不可欠と思われるからである。

ストレスへの対処についての従来の研究では、自己・環境・未来に対する正確な認知の重要性が指摘されているだけでなく、「自己に都合のよいようなポジティブな方向に歪んだ認知」もまた有効な対処につながるがゆえに重要とされ、「ポジティブ・バイアス」ないしは「ポジティブ幻想」などと呼ばれている。その代表的な主張は Taylor, S.E. と Brown, J.D. によって行われてきたポジティブ幻想に関する研究であり、ポジティブ幻想がストレスフルな状況であらわれやすいこと、それが末期がん患者などの強いストレス状況にある人の適応にとって重要な意味を持つこと、ポジティブ幻想の内容には、①非現実的にポジティブな自己認知、②コントロールの過大評価、③非現実的な楽観主義という3つの側面があること、などが明らかにされてきた (Taylor, 1983; Taylor & Brown, 1988; Taylor & Armor, 1996; Brown, 1993)。

大学生の様々な状況での適応について考える場合、自己に都合のよいようなポジティブな方向に歪んだ認知を「ポジティブ幻想」と呼ぶことは、表現として少し強すぎると考えられる。そこで、本研究では「ポジティブ・バイアス」の方を用いることとする。

橋本 (2002) は、大学生を対象に、様々な仮想的ストレスフルイベントとその対処におけるポジティブ・バイアスの現れ方を比較した結果、学業・職業におけるストレスフルイベントにおいて特にポジティブ・バイアスが現れやすいことを示した。ストレスの対処に「ポジティブ・バイアス」が必要とまでは言えないかもしれないが、「ポジティブな自己信念」がストレスの対処において果たす役割は重要であり、これが「大学進学動機」と「大学生活におけるストレス対処」のあり方をつなぐ重要な仲介変数である可能性が高いと考えられる。本研究では、このことを実証的に示していきたい。

本研究の目的：本研究の目的は、大学進学動機とポジティブな自己信念が大学生活における様々なストレス対処に及ぼす影響の関係を多層的に調べるため、大学生を対象に質問紙調査を行い、共分散構造分析によるモデル化の手法を用いて3者の関係を検討することにある。

方 法

被験者 京都大学の学部生および大学院生121名 (年齢範囲19～38歳、平均21.55歳、SD = 2.73)。被験者の性別、学校種別 (学部、大学院)、大学での年数、所属学部など特徴別の内訳を Table 1 に示す。

質問紙調査の内容 フェイスシート (年齢、性別、学部、学校種別、大学での年数) についての質問の後、大別して次の4種類の項目について調査した (その他の調査項目も含まれていたが、関連性が少ないので本稿ではその部分は割愛する)。

I. 大学進学動機：「◇私が大学に入学したのは…」のリード文に続き、「1. 私の両親が勧めてくれたから」など11の理由について、それぞれ5段階 (1点「まったくあてはまらない」～5点「とてもよくあてはまる」) で評定することが求められた。11項目の具体的内容は Table 2 を参照のこと。

II. 自身についての個人的見解：「◇あなた自身についての個人的見解」として、「1. 今の自分に満足している」など5項目 (Table 3 の S1 から S5 参照) について5段階評定 (1点「まったくあてはまらない」～5点「とてもよ

Table 1 被験者の内訳

所属部局	計	性別		種別		大学での年数									平均年齢
		男	女	学部	大学院	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	
文	39	18	21	38	1	15	18	2	1	2	1	0	0	0	20.90
教育	57	27	30	53	4	21	13	8	10	2	0	1	1	1	21.49
経済	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	23.00
総合人間	5	2	3	5	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	21.00
人間環境学研究科	3	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	1	2	0	27.00
理	10	6	4	8	2	1	3	2	1	2	0	0	1	0	22.40
農	2	1	1	1	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	25.00
不明	4	2	2	3	1	0	2	1	1	0	0	0	0	0	21.00
合計	121	57	64	109	12	37	40	15	14	7	1	2	4	1	21.55

くあてはまる」)による回答を求めた。

Ⅲ. 自身の未来についての見解:「1. 自分の人生が両親と同じようになっていたらよいと思う」など3項目(Table 3のF1, F2, F3参照)について5段階評定(1点「まったくあてはまらない」～5点「とてもよくあてはまる」)による回答を求めた。

Ⅳ. 大学生活におけるストレスに関する質問:「◇ストレスとは、周囲の状況や環境から影響を受けて、抑うつ・不安・怒り・イライラなど不快な気持ちを長く感じている状態をいいます。あなたは、大学生活を送っていて、次のことに対して、どの程度のストレスを感じていますか。」という説明の後、次の2種類の質問を行った。

Ⅳ―①. 5つの領域において現在感じているストレス度:大学生活においてストレスを経験すると思われる領域のうち、代表的なものとして「学業に関すること」、「人間関係に関すること」、「経済(お金)に関すること」、「健康に関すること」、「進路に関すること」の5つの領域をあげ、それぞれの領域について、現在被験者がどの程度のストレスを感じているかを7段階評定(1点「全然感じていない」～7点「非常に感じている」)で尋ねた。

Ⅳ―②. ストレスフルな状況におけるポジティブな認知:続いて、上記の5種類の領域を1つずつ提示し、「以下の□に示したことに対してあなたがストレスを感じていると想定してください。その時あなたは、そのこと、その状況や自分自身に対して、次のような考え方をどのくらいすると思いますか」としてTable 4に示される5項目それぞれに対して7段階評定(1点「全然あてはまらない」～7点「非常にあてはまる」)による回答を求めた。この5項目は、橋本(2002)の研究に基づき、ポジティブな認知を測る上で重要であることが確認されたものである。

調査時期と調査手続 調査は2002年6月～7月に実施した。A4判14ページの冊子形式に綴じた調査用紙を、複数の授業の時間に配布し、後日指定の期間・場所に本人が持参する形式で回収した。なお、調査用紙と同時に提出する出席カードによって、授業への出席を確認するという形式をとった。

結 果

以下の分析においては、全体の被験者数が121人と多変量解析を行うには少なめであるので、性別、所属部局、種別(大学、大学院)、大学での年数などの条件は込みにした結果のみを見ていくことにする。

1. 「大学進学動機」尺度の構成

大学進学動機尺度11項目について、因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。固有値の推移と解釈可能性によって3因子解が妥当であると考えられた。その結果がTable 2に示される。

第1因子($\alpha=0.752$)には、親、先生、友人など周囲の親しい人に勧められたからという4項目が高く負荷しており、この因子に「周囲の勧め」と命名した。第2因子($\alpha=0.676$)には、「現段階では他に何をしてもいい思いつかないから」など、特に目的を持たないで進学したという意味の3項目が高く負荷しており、「モラトリアム」と命名した。第3因子($\alpha=0.609$)には、学業その他の能力を向上させたいからという3項目が高く負荷しており、「能力の向上」と命名した。各因子で0.40以上の因子負荷量を持つ項目の合計得点を算出し、下位尺度得点とした。

Table 2 「大学進学動機」尺度の因子分析結果

No. 項目	F1	F2	F3	共通性
1 私の両親が勧めてくれたから。	0.726	-0.112	-0.005	0.467
5 私の友人もたいてい大学に行ったから。	0.663	0.249	-0.186	0.643
2 私の先生が勧めてくれたから。	0.654	-0.024	0.167	0.474
3 私の友人が勧めてくれたから。	0.614	-0.132	0.198	0.398
8 まだあまり働きたくないから。	-0.106	0.823	0.089	0.620
10 現段階では他に何をしようか思いつかないから。	0.208	0.621	-0.142	0.549
9 大学のクラブ・サークルでスポーツや音楽の生活にひたりたいから。	-0.148	0.562	0.192	0.299
7 大学で自分の技能や能力をさらに伸ばしたいから。	-0.037	-0.041	0.629	0.391
6 大学で成功するだけの能力を持っていると思っているから。	0.173	0.017	0.595	0.419
11 わくわくするような社会生活を過ごしたいから。	-0.023	0.218	0.536	0.334
4 国家資格、学位、免許状などを取得したかったから。	0.142	0.054	0.332	0.155
	F1	F2	F3	
因子間相関	F1 1			
	F2 0.441	1		
	F3 0.151	0.028	1	

Table 3 「ポジティブな自己信念」尺度の因子分析結果

No. 項 目	F1	共通性
F2 自分の将来を楽しみにしている。	0.730	0.533
S4 人生で起こる出来事を自分でコントロールできていると感じている。	0.671	0.451
S3 現在のところ、自分の人生がたどっている方向に満足している。	0.651	0.424
S1 今の自分に満足している。	0.581	0.338
F3 自分の未来の職業生活は充実したものと思う。	0.561	0.315
S5 私は自分がまじめな学生だと思っている。	0.395	0.156
S2 現在の友人やその数に満足している。	0.157	0.025
F1 自分の人生が両親と同じようになったらよいと思う。	0.073	0.005
寄与		2.064
寄与率 (%)		41.275

註. Sは「自身についての個人的見解」、Fは「自身の未来についての見解」の項目である。

2. 「ポジティブな自己信念」尺度の構成

「自身についての個人的見解」および「自身の未来についての見解」の2尺度については、両尺度とも項目数が少なく、内容的には自己についての見解としてまとめることが可能であると考えられたため、両者をまとめて因子分析（最尤法）を行ったところ、Table 3に示した通り、自分の将来を統制できるという信念や将来への期待を示す項目の負荷量が高い1因子構造であることが確認された（ $\alpha=0.774$ ）。そこで、Table 3において0.40以上の因子負荷量を持つ5項目から構成される尺度を「ポジティブな自己信念」と命名した。

3. 「ストレスフルな状況におけるポジティブな認知」尺度の構成

大学生活においてストレスを経験すると思われる5領域のストレス度の評定平均値は、高いものから順に、「進路に関すること」5.41、「学業に関すること」4.80、「人間関係に関すること」4.48、「経済（お金）に関すること」4.32、「健康に関すること」3.95となった。ストレスの領域を要因とする1要因分散分析を行った結果、主効果が有意（ $F(4,480)=22.92, p<.001$ ）であり、Ryan法による多重比較の結果、進路>学業≒人間関係≒経済≒健康、学業>経済≒健康、人間関係>健康となった（ $Mse=1.60, p<.05$ ）。ただし、評定段階4が「どちらともいえない」、5が「やや感じている」であるから、平均的には本研究の被験者のストレス度はあまり高いとは言えないであろう。

Table 4 「ストレスフルな状況におけるポジティブな認知」尺度の因子分析結果

No. 項 目	F1	共通性
4 今の状況は良くなっていくだろうと思う。	0.770	0.593
3 今の状況を、自分の努力次第で何とかできると思う。	0.693	0.480
5 自分の未来は同じようなことでストレスを感じている他の人の未来よりも良いと思う。	0.517	0.268
1 このストレスは、自分にとって悪いことばかりでなく良いことももたらすと思う。	0.414	0.172
2 同じようなことでストレスを感じている人の中では、今の自分の状態はまだましな方であると思う。	0.360	0.130
寄与率 (%)		1.642 (32.839)

次に、この領域の回答を込みにして、ストレスおよびその対処のポジティブな認知を測る5項目について因子分析（最尤法）を行ったところ、1因子構造であることが確認された（Table 4）。これを「ストレスフルな状況におけるポジティブな認知」尺度と命名し、5項目の合計得点を5領域ごとに算出し、それぞれの下位尺度得点とした。

4. 基礎統計量

ここまで構成された「大学進学動機」尺度の下位尺度（「周囲の勧め」、「モラトリアム」、「能力の向上」）、「ポジティブな自己信念」尺度、領域別ストレス度、「ストレスフルな状況におけるポジティブな認知」尺度それぞれの信頼性係数、平均値、標準偏差、得点可能範囲、最小値、最大値などの基礎統計量を Table 5 に示す。

5. 大学進学動機、ポジティブな自己信念、ストレス度の相互相関

5. 1. 大学進学動機とポジティブな自己信念との相関：まず、「大学進学動機」の下位尺度と「ポジティブな自己信念」との相関（Pearson の積率相関係数）が Table 6 に示される。「能力の向上」と「ポジティブな自己信念」との間には中程度の有意な正の相関が見られたが、「周囲の勧め」、「モラトリアム」と「ポジティブな自己信念」との間には関連が見られなかった。

5. 2. 大学進学動機ならびにポジティブな自己信念とストレス度との相関：次に、「大学進学動機」、「ポジティブな自己信念」と、5つの領域におけるストレス度との相関を求めた（Table 7）。大学進学動機との関連においては、「モラトリアム」動機と、3つの領域におけるストレス度との間に高くはないが有意な正の相関が見られた。これは、

Table 5 基礎統計量

	信頼性係数	平均値	標準偏差	得点可能範囲	最小値	最大値
大学進学動機						
周囲の勧め	0.752	8.95	3.71	4～20	4	17
モラトリアム	0.676	8.76	3.01	3～15	3	15
能力の向上	0.609	9.62	2.41	3～15	3	15
ポジティブな自己信念	0.774	15.40	3.71	5～25	6	23
ストレス度						
進路に関すること	—	5.41	1.28	1～7	2	7
学業に関すること	—	4.80	1.39	1～7	2	7
人間関係に関すること	—	4.48	1.54	1～7	1	7
経済（お金）に関すること	—	4.32	1.63	1～7	1	7
健康に関すること	—	3.95	1.58	1～7	1	7
ストレスフルな状況における ポジティブな認知						
進路に関すること	0.787	23.27	4.40	5～35	5	35
学業に関すること	0.716	23.71	3.94	5～35	9	35
人間関係に関すること	0.702	20.96	4.51	5～35	6	34
経済（お金）に関すること	0.647	22.41	4.22	5～35	5	35
健康に関すること	0.613	20.93	4.31	5～35	8	35

Table 6 大学進学動機とポジティブな自己信念との相関

	大学進学動機		
	周囲の勧め	モラトリアム	能力の向上
ポジティブな自己信念	0.004	-0.139	0.355**

** $p < .01$

明確な動機を持たないまま進学することと大学生活でのストレスとに関連性があることを示唆している。他方、「ポジティブな自己信念」とストレス度との間には、3つの領域で負の相関が見られ、特に「学業」においてその関連性が強かった（-0.465）。

5. 3. 大学進学動機ならびにポジティブな自己信念とストレス状況におけるポジティブな認知との相関：大学進学動機ならびにポジティブな自己信念と、5領域のストレス状況におけるポジティブな認知との相関を求めた。Table 8の結果に示されるように、ストレス状況におけるポジティブな認知との相関は幾つかの点で見られたが、特に「進路」と「学業」の2領域のストレス状況におけるポジティブな認知は「能力の向上」動機および「ポジティブな自己信念」と密接な関連が見られた。

6. 共分散構造分析によるモデル

以上のような単相関の分析は、2つの指標間の関連性を示すだけで、両者の因果性を示すものではないこと、多くの指標の相互関係を示すものではないことの2点から、解釈できることの限界が大きい。そこで、「大学進学動機」、「ポジティブな自己信念」、「ストレス状況におけるポジティブな認知」の関係を共分散構造分析によるモデル構成を試みることによって検討した。分析にあたっては、各尺度の下位尺度得点を観測変数として用い、統計パッケージAmos 4.0を使用して行った。その結果がFigure 1に示される。Figure 1のモデルの適合度について見ると、GFIとCFIの値は十分だがAGFIとRMSEAの値はやや不十分かもしれない。しかし、全体的に見ると一応十分な適合度を持ったモデルと判断できる。

Table 7 大学進学動機、ポジティブな自己信念とストレス度との相関

ストレス度	大学進学動機			ポジティブな自己信念
	周囲の勧め	モラトリアム	能力の向上	
進路に関すること	0.202	0.203*	-0.101	-0.267**
学業に関すること	0.100	0.152	-0.176	-0.465**
人間関係に関すること	0.102	0.249**	0.065	-0.250**
経済（お金）に関すること	-0.154	0.204*	0.070	-0.079
健康に関すること	0.031	0.084	0.116	-0.114
ストレス度の合計	0.107	0.274**	0.005	-0.349**

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 8 大学進学動機、ポジティブな自己信念とストレスフルな状況におけるポジティブな認知との相関

ストレスフルな状況における ポジティブな認知	大学進学動機			ポジティブな自己信念
	周囲の勧め	モラトリアム	能力の向上	
進路に関すること	0.027	0.009	0.444**	0.529**
学業に関すること	0.021	-0.023	0.446**	0.605**
人間関係に関すること	0.063	-0.012	0.042	0.330**
経済（お金）に関すること	0.243**	0.170	0.209*	0.180*
健康に関すること	0.008	0.076	0.087	0.169

* $p < .05$, ** $p < .01$

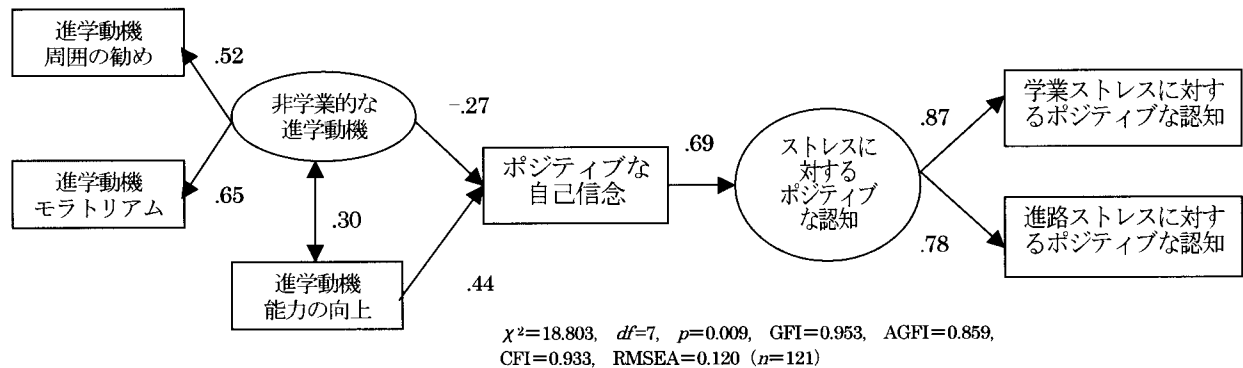


Figure 1 大学進学動機、ポジティブな自己信念、ストレス状況に対するポジティブな認知の関係

※図中の係数は「非学業的な進学動機」→「進学動機能力の向上」、「非学業的な進学動機」→「ポジティブな自己信念」については $p < .10$ で、その他の係数については $p < .05$ で有意であった。
 ※誤差変数は省略した。

Figure 1 から、「進学動機」が「ポジティブな自己信念」を介して学業・進路に関する「ストレス状況におけるポジティブな認知」に影響するという流れが示唆された。「周囲の勧め」および「モラトリアム」という消極的な進学動機は「ポジティブな自己信念」に負の影響を及ぼしている。これに対し、「能力の向上」という積極的な進学動機は「ポジティブな自己信念」に正の影響を及ぼしている。そして、「ポジティブな自己信念」は、様々な領域のストレスの中でも特に学業・進路に関する状況におけるポジティブな認知に対して正の影響を及ぼしている、ということが明らかになった。すなわち、進学動機が直接に「ストレス状況におけるポジティブな認知」に影響するのではなく、「ポジティブな自己信念」の形成を介して影響するというプロセスが示唆されたのである。

考 察

1. 「ポジティブな自己信念」の仲介モデル

本研究の最も重要な結果は、多様な大学進学動機を持って入学してくる学生が大学生活の中で遭遇する様々なストレス（特に学業・進路に関するストレスフルな状況）に対処する際に「ポジティブな自己信念」を仲介してポジティブな認知を形成するということである（Figure 1）。単相関のデータ（Table 6, 7, 8）からは大学進学動機と大学生活におけるストレスの対処のあり方が直接に結びつくように見えるかもしれないが、むしろ「ポジティブな自己信念」を仲介して結びついているということを示したことは、共分散構造分析によるモデル化の手法によってはじめて可能になったのであり、この手法が有効であったことを示唆している。大学進学動機は高等学校までや高校卒業後の受験生活の中で形成されるものであり、それが大学入学後のストレスへの対処のあり方に直接に結びつくと考えよりは、「能力の向上」を進学動機とすることが「ポジティブな自己信念」と結びつき、それがストレスフルなイベントに遭遇したときに状況へのポジティブな認知をもたらすと考える方がより妥当であろう。

Figure 1 において、非学業的な進学動機（「周囲の勧め」と「モラトリアム」）は「ポジティブな自己信念」とは低い負の相関関係（ $-.27$, $p < .10$ ）にあり、非学業的な進学動機と「能力の向上」とは低い正の相関関係（ $.30$, $p < .10$ ）にあることにも注意しなければならない。後者は、非学業的な進学動機と「能力の向上」動機が二律背反ではなく、個人の中で共存しうるものであることを示唆している。このことも大学進学動機の多様性のあらわれの一つとして解釈すべきことかもしれない。

2. 本研究の問題点

本研究の実施を通じて、今後研究を進める上で改善が望まれる点について述べる。

まず本研究の被験者のサンプリング上の問題について述べたい。本研究は、学力的に優れた学生の多い「高度に競争的 (highly competitive)」な大学の一つに属する学生対象の調査であり、ストレスの強さも全般的に低かったと考えられ（Table 5 「ストレス度」）、これだけでは論議を深めるデータとして十分であるとは言えないかもしれない。今

後、より多様なサンプルを集めて検討していく必要がある。

また、モラトリウムや不適応の状態にある学生を質問紙調査法で調べるのは限界や制約が大きいと考えられる。特に、本研究では、授業時間に調査用紙を配布する手続きをとったが、この手続きでは「授業からの逃避」を行っているモラトリウム状態の学生を捕捉することができない。仮に授業時間で捕捉できたとしても、質問紙調査法で彼らの抱えている問題をどの程度十分にとらえることができるかについては、疑問が残るだろう。

仮想的なストレスフルイベントについてではなく、卒業論文や修士論文の作成、大学院進学試験の準備、就職活動など、学生にとって死活的に重要なイベントとの関連で調査することが不可欠である。ストレスフルイベントとしての卒業論文作成とその場面におけるポジティブな自己信念の問題については、橋本 (2003) の研究で検討が進められている。橋本 (2003) の研究でも、ポジティブな自己信念が高い群が低い群よりも抑うつ得点が有意に低く、卒業論文に対するポジティブな認知得点が有意に高いことが示された。

以上のように、ポジティブな自己信念が学生生活における適応において有用であることが示されつつあるが、このポジティブな自己信念自体が個人の中でどのように形成されるのかについても、さらに研究を進めていかねばならない。その際、本研究の結果が示唆していることは、進学動機「能力の向上」が「ポジティブな自己信念」と結びつき、それが「進路」「学業」というストレスフルなイベントに遭遇したときに状況へのポジティブな認知をもたらすという結果 (Figure 1) において、進学動機のうちの「周囲の勧め」や、「人間関係」、「経済 (お金)」、「健康」という他の領域のストレスはこの枠組みの中に入っていないということであり、進学動機やストレスに「領域固有性」があるのではないかという点である。この点も今後解明を要する大きな問題である。

3. 本研究の教育的含意

以上のように、本研究は今後さらに展開を要する問題が多々あることを示しているが、しかし本研究は現在の結果だけでも、重要な教育的含意を十分に有する、ということについて最後に指摘しておきたい。

本研究の第一著者は、2003年3月に公表された『京都大学自己点検・評価報告書Ⅳ 学生支援・学生サービス』に、京都大学大学評価委員会の『学生支援』作業部会委員として同報告書の作成に関与した (京都大学、2003)。この学生支援・学生サービスという観点から、以下に本研究の教育的含意を検討する。

本研究では、「能力の向上」を進学動機とすることが学生のポジティブな自己信念につながり、それが大学生活の中心的なストレスと考えられる「学業ストレス」と「進路ストレス」という2つのストレスに対するポジティブな認知に結びつくという結果 (Figure 1) が最も重要な点である。この一連の流れにうまく乗っていける学生は、大学側が実施する学生支援・学生サービスをあまり必要としないか、学生支援・学生サービスが比較的有效に機能することが期待できる。他方、モラトリウムなどの非学業的な進学動機は、学生のポジティブな自己信念につながらず、その結果、学業および進路ストレスに対するポジティブな認知に結びつかない。このことの意味は、①モラトリウムが必ずしも大学入学後の問題でなく、大学進学動機にまでさかのぼってみる必要があること、②学生支援・学生サービスにおいて学業ストレスや進路ストレスへの対処を考える場合に、学生自身のポジティブな自己信念の向上というプロセスが重要であることを示唆している。

京都大学の学生支援・学生サービス活動として、全学的には「カウンセリングセンター」という組織が学生のメンタルヘルスの問題を取り扱っている。しかし、メンタルヘルスに関わる問題を抱えて同センターに相談に行く学生以外にも、学業ストレスや進路ストレスへの対処を要する学生は少なくない。そのような学生に接する立場の教官は、学生がポジティブな自己信念を持っているかどうか、持っていないとしたらどのようにしてポジティブな自己信念を学生の中に形成しうるか、という視点が重要であることを本研究の結果は示唆している。

上述の『京都大学自己点検・評価報告書Ⅳ 学生支援・学生サービス』では、学生支援・学生サービスとして、生活支援、経済支援、課外活動支援、危機管理とならんで、学習支援と進路支援の2つの柱についての自己点検・評価が行われている。学習支援における学習キャリア支援、および、進路支援におけるキャリアサポートは、今後大学にとってさらに重要な活動になっていくことが予想される。そのとき、大学への進学動機の形成過程とポジティブな自己信念の有無は、支援活動を実施する上で極めて重要な問題となるだろう。

注

本研究は、ニュージーランドのオークランド大学スチューデント・ラーニング・センター所長エマニュエル・マナロ博士(Dr. Emmanuel Manalo, Director of the Student Learning Centre, the University of Auckland, New Zealand)との共同研究プロジェクトの一環として行っている研究で収集したデータのうち、共同研究には使用しない部分をまとめたものである。

本研究の実施に当たって、文部科学省21世紀COEプログラム(京都大学、D-2)の補助を受けた。記して感謝申し上げる。

引用文献

- 安藤明人 1989 女子大学生の大学適応に関する研究(1) —大学への動機づけ、人格特性と適応との関連—。武庫川女子大学紀要人文・社会科学編, **37**, 123-135.
- Brown, J.D. 1993 Coping with stress: The beneficial role of positive illusions. In A.P. Turnbull & J.M. Patterson (Eds.), *Cognitive coping, families and disability*. (pp.123-133). Baltimore, MD: Paul H. Brookes.
- 洲上克義 1984 進学志望の意思決定過程に関する研究。教育心理学研究, **32**, 59-63.
- 橋本京子 2002 ストレスフルイベントにおけるポジティブ幻想(1) —内容・深刻性の異なるストレスフルイベントにおけるポジティブ幻想の現れ方の違いについて—。日本心理学会第66回大会発表論文集, 131.
- 橋本京子 2003 卒業論文作成時におけるポジティブ幻想の現れ方—卒業後に希望する進路による現れ方の違い、および精神的健康との関連について—。日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 379.
- 京都大学 2003 京都大学自己点検・評価報告書Ⅳ 学生支援・学生サービス。
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—。教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 下山晴彦 1996 スチューデント・アパシー研究の展望。教育心理学研究, **44**, 350-363.
- Taylor, S.E. 1989 *Positive illusions: Creative self-deception and healthy mind*. New York: Basic Books.
- Taylor, S.E., & Armor, D.A. 1996 Positive illusions and coping with adversity. *Journal of Personality*, **64**, 873-898.
- Taylor, S.E., & Brown, J.D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- トロウ, M. (天野郁夫、喜多村和之訳) 1976 高学歴時代の大学——エリートからマスへ。東京大学出版会(UP選書)。
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討—。教育心理学研究, **41**, 200-208.